

聖書：使徒 9：19b～31

説教題：主を恐れかきこみ

日時：2013年11月3日

ダマスコ途上で復活の主にお会いして、回心へと導かれたサウロ。さらに異邦人、王たち、イスラエルの子孫にイエス・キリストを宣べ伝える使命を頂いたサウロ。彼はその後どうしたのでしょうか。彼は数日間、ダマスコの弟子たちと共にいた後、ただちに諸会堂で「イエスは神の子であると宣べ伝え始め」ます。サウロにとって数日前まで、イエスは神に呪われた者でしかありませんでした。その弟子たちがどんなことを語っても、呪いの木で殺された者がメシヤであるはずはないと彼らの主張を全否定して来ました。しかし彼は今も生きておられる栄光の主に会いました。その方はまさに神の子なるお方であり、そのお方が私のような罪人のために身をかがめて、あの呪いの木にまでご自分をささげてくださいました。そしてとてつもなく大きな犠牲を通して私たちに罪から贖ってください！このことに今や目を開かれた者として、サウロは心からの感謝と感動をもって語り始めたのです。驚いたのは会堂に集まっていた人々でした。主の弟子たちを捕らえ、エルサレムに引っ張って行くために到着した彼のこと、そのことを巧みな知恵をもって語るとばかり思っていたのに、丸っきりそれとは反対のことを語っている。何とあのイエス・キリストは神の子であり、神が遣わしたもうメシヤである！と言っている。人々は全く仰天してしまいます。21 節：「これを聞いた人々はみな、驚いてこう言った。『この人はエルサレムで、この御名を呼ぶ者たちを滅ぼした者ではありませんか。ここへやって来たのも、彼らを縛って、祭司長たちのところへ引いて行くためではないのですか。』」しかしサウロはますます力を増し、イエスがキリストであることを証明します。日を重ねるごとに、彼はイエス・キリストのために働くとはどういうことなのかを体得し、福音の提示の仕方、論証の仕方においても力を増して行ったのでしょう。もともと旧約聖書に精通していた彼のこと、その使信を正しく理解してからは、誰も太刀打ちできないほどに力強く宣教したのでしょう。それでダマスコに住むユダヤ人たちは、うろたえるばかりだったのです。

23 節には「多くの日数がたって後」とあります。この期間、彼は何をしていたのでしょうか。ガラテヤ書を参照すると、彼はこの時期にアラビヤへ出て行ったことが分かります。その期間は 2～3 年であったことも分かります。何のためにその地方へ行ったのか、詳しいことは聖書に書かれておらず、色々な人が色々な推測をしています。ある人はさびしい所で祈りに集中するために出て行ったのではないかと言ひ、ある人は主からさらに教えを受けるために退いたのだらうと言ひます。さらにある人は、サウロは 12 使徒たちのように 3 年間主と共に過ごす期間がなかったから、それを補うために 3 年間アラビヤで主の特別授業を受けていたのだらうと言ひます。いずれであれ、彼がアラビヤからもう一度ダマスコに戻って来た後、その町ではサウロを殺そうとする陰謀が張り巡らされていました。そのため、サウロは夜中にかごに乗せられて城壁伝いにつり降ろされて、この町を脱出することになったのです。

おそらくこれと同じ出来事について述べているのがⅡコリント 11 章 32～33 節です。「ダマスコではアレタ王の代官が、私を捕らえようとしてダマスコの町を監視しました。そのとき私

は、城壁の窓からかごでつり降ろされ、彼の手をのがれました。」アレタ王とはサウロが退いたアラビヤ地方の王の名前です。つまり今回の陰謀にはダマスコのユダヤ人たちばかりでなく、アラビヤ地方の代官も関わっていたこととなります。このことはサウロはアラビヤに退いていた間も、宣教活動を行っていたことを示しているのではないのでしょうか。その宣教によってアラビヤ地方にもある種の騒動が起こった。その町がかき回されるような現象が起こった。そこでアレタ王の代官がサウロに手をかけようとしたのです。そしてダマスコに住むユダヤ人と協力したのです。こう見ると回心後のサウロはダマスコでも、アラビヤでも宣教に没頭したことが見えて来ます。しかしその中で、彼はさっそくキリストのための苦しみも味わうようになりました。前回の 16 節でイエス様はアナニヤに言っていました。「彼がわたしの名のために、どんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示すつもりです。」サウロはそのことを初めて身をもって体験します。そしてこれは相当危険な出来事であったと思われまます。先ほどの II コリント 11 章にはパウロが受けた幾多の苦難がリストアップされていますが、その最後にダマスコで城壁の窓からつり降ろされた出来事が記されています。これはこの出来事がサウロが生涯受けた苦難の中でも、とりわけ大変なものであったことを暗示しているのではないのでしょうか。だから彼は自らの苦難をリストアップする中で、この出来事を特に思い起こし、詳しく記したのではないのでしょうか。かごに乗ってスイスイ城壁を伝い降りたと読むと、何か面白いことのようにさえ見えますが、いかにこの時、彼は非常に危うい厳しい状態に置かれたのかが見えてくるように思います。

ダマスコを抜け出たサウロは次にエルサレムに向かいます。しかしすぐには弟子たちの仲間に入ることができませんでした。彼らは非常に警戒していたのでしょう。サウロが回心したというニュースを聞いても、以前の彼を知っている者たちとしてはとても信じられない。それに回心のニュースから 2~3 年の月日が経っていたなら、この間、何をしていたのか。なぜ彼はエルサレムに一度も来なかったのか。悪い策略でも練っていたのではないか。そのように恐れて、皆がサウロを避けていたのでしょう。そんな中、あのバルナバ、訳して「慰めの子」が、サウロの仲介役を果たしてくれます。そしてサウロがダマスコでどのように主にお会いしたのか、また主は何と彼に語られたのか、そしてダマスコでどのように宣教したのか、バルナバはサウロから話を聞き、使徒たちに説明します。このバルナバは後にもサウロを見つけて、表舞台へ引っ張って来る重要な働きをします。この彼のとりなしによって、サウロはエルサレムで弟子たちと共にいて自由に出入りできるようになったのです。そしてエルサレムでもイエス・キリストを大胆に宣教します。ダマスコ、アラビヤ、エルサレム、とどこにおいても自分の使命に没頭する彼です。しかしこのエルサレムでも彼の命は狙われます。29 節に「ギリシヤ語を使うユダヤ人たちと語ったり、論じたりしていた」とありますが、このヘレニストのユダヤ人たちこそ、ステパノを死に追いやり、主の弟子たちを諸地方に追い散らした張本人たちです。サウロもかつてはこの人たちと一緒に組んでいました。彼らにしてみれば、サウロは裏切り者です。かつては自分たちと一緒に立場に立っていたリーダー的存在だったのに、今やイエスこそキリストだなどと語っている。そのために今度はサウロが逆に迫害され、命をつけ狙われることになってしまいます。そこで兄弟たちは、サウロを北方のカイザリヤへ連れて行きます。

そしてそこから船でさらに北のサウロの出身地、タルソへと送り出したのです。とにかくいるだけで騒ぎが巻き起こるサウロです。彼を無事送り出した時、兄弟たちはほっと胸をなでおろしたことでしょう。サウロはこうして使徒の働きにおいて一旦背後に退きます。次に出て来るのは 11 章 25 節からです。バルナバによって見つけ出されて、異邦人教会のセンターとなるアンテオケ教会へ引っ張り出され、さらに大きな働きを開始する時まで、舞台の背後で必要な準備と導きを主から受ける期間を過ごしたのでしょう。

最後 31 節に、こしばらくのまとめとなる言葉が記されています。31 節：「こうして教会は、ユダヤ、ガリラヤ、サマリヤの全地にわたり築き上げられて平安を保ち、主を恐れかしこみ、聖霊に励まされて前進し続けたので、信者の数がふえて行った。」前にも似たようなまとめの言葉が 6 章 7 節にありました。今後もこのようなまとめの言葉が何回か使徒の働きでは記されて行きます。これは著者ルカによるひとまとまりの区分を示しているものと言えます。ですから 31 節の「こうして教会は」という部分は、前回のまとめの句以降、すなわち 6 章 8 節以降、書き綴って来たすべてのことを指していると言えます。このまとめの句は大きく二つのことを述べています。その一つ目は 31 節前半にある通り、教会は「平安を保ち」ということです。6 章 8 節以降で私たちは何を見て来たのでしょうか。大まかに言えば、それはステパノ、ピリポ、サウロのことです。振り返ればステパノとユダヤ人の論争から始まって、彼のサンヘドリンにおける弁明と殉教。そこから始まった迫害。信者の周辺諸地域への離散。そんな中でピリポによる思わぬ成果もありましたが、サウロによる激しい迫害も本格化しました。それはまさに嵐のような日々だったのではないのでしょうか。ところがそのようなことを経て、何と教会はユダヤ、ガリラヤ、サマリヤの全地にわたって築き上げられたのです。この期間に教会は地域的に相当な拡がりを持ち、敵対していたサマリヤにまで福音が届けられたのです。しかもユダヤ、ガリラヤ、サマリヤに別々の教会が建ったものではありません。31 節の「教会は」という言葉は単数形です。つまりイエス・キリストを頭とする一つの教会がユダヤ、ガリラヤ、サマリヤの全地に渡って建て上げられたのです。そこには一致から来る主の平安が支配していました。一体誰がこのような結果を期待できたのでしょうか。これはまさに主の奇しい御業以外の何ものでもありません。このことを思う時、改めて私たちはどんな時も主にこそ望みを置くべきであると教えられます。私たちが信じている神は、私たちの目に最悪と見える状況からも最善を取り出すことができるお方です。信者たちが迫害され、散り散りばらばらにされる苦しみの中で、まさかのサマリヤ伝道が導かれました。またサウロがダマスコに近づいて、もはやその町の運命も時間の問題と思われた時に、彼の回心が起こりました。教会を取り巻く状況はこうして大きく変わり、将来の新しい展望さえ見えて来ました。このように私たちの想像を越えて働かれる神がおられること、従ってこの神にこそ私たちはいつも目を高く上げ、信頼して従うべきことを教えられます。

そしてもう一つ 31 節で述べられていることは、教会が主を恐れかしこむ生活をささげていることです。ステパノは主に忠実な証しをしました。迫害によって散らされた信者たちは行く先々で主を宣べ伝えました。ピリポによってサマリヤ伝道が導かれると、使徒たちは主の御心と受け止め、彼ら自身もその伝道のわざに当たりました。ピリポは主の命令に従って、一人の

エチオピア人の救いのために仕えました。サウロの回心におけるアナニヤの隠れた貢献も見逃せません。またサウロは回心後、直ちに与えられた使命に励みました。バルナバは主を恐れかしくむゆえに、サウロを引き受け、仲介の役割を果たしました。そしてエルサレムの兄弟たちも彼を受け入れ、心一つにして歩みました。このように彼らは目の前の困難にただ慌てるのではなく、また人ではなく主こそを恐れかしくんで、この方に従う歩みを第一に大切にしたのです。そこに聖霊の励ましが与えられました。その結果として信者の数がふえて行ったのです。

私たちもここから学びたいと思います。どのような困難に直面しても、そこから人間の予測をはるかに超える奇しい導きをもって平安へ導くことができる主が共にいてくださいます。主はあのサウロさえ救いに導かれました。何をしてくださるか、私たちには言い当てられないほどの恵みのみわざをなしてくださるお方です。その方が教会のかしらとして、共にいてくださいます。私たちに求められていることは、この主を見上げ、この主を恐れかしくんでなすべき歩みを御前にささげることです。ここに登場したそれぞれの信者たちの果たした役割は重要です。人間的に誰かを嫌ったり、はじき出したり、不服従の歩みをしていては教会の進展はありません。一人一人、主を心から恐れかしくみ、主に従う生活をする。そこには必ず聖霊の助けと励ましが与えられる。そしてすべての障害を越えて、主がさらなる成長を導いてくださる。この主を恐れかしくみ、主と共に歩む、そのからだなる教会の祝福に歩んで行きたいと思いません。